パリクシトゥ王は解放を探し求める

『シュリーマッド・バーガヴァタム』の物語に基づくお話

インドの教典『シュリーマッド・バーガヴァタム』は、世界は 4 種類の時代、つまりユガに分かれていると教えています。1 番目の時代、クリタ・ユガでは、ダルマは完全であり、すべての人が道徳的でした。2 番目の時代、トレタ・ユガでは、ダルマはその力の 4 分の 1 を失いました。3 番目の時代、ドゥワーパラ・ユガでは、さらに 4 分の 1 を失いました。カリ・ユガの現代では、ダルマは元々の力の 4 分の 1 のみ残り、不道徳がはびこっています。

カリ・ユガの初期のこと、パリクシトゥ王はインド北部のクル王朝を治めていました。パリクシトゥはインドの叙事詩『マハーバーラタ』の英雄アルジュナの孫にあたります。この未来の王がまだお腹の中にいるとき、クリシュナ神は彼の命を守り、パリクシトゥと名付けました。それは「試され証明された」という意味です。聖人たちはパリクシトゥの栄光に満ちた将来を予言しました。そしてその通りになったのです。パリクシトゥ王は拡大し続けるカリ・ユガの闇と戦う誓いを立て、彼の勇敢なリーダーシップの下、彼の国は道徳、平和、そして知識とともに栄えました。

ある日、狩りの途中で、王は森の中で道に迷ってしまいました。長い時間さまよい、喉の渇きと空腹に疲れ果てた王は、やっと小さなアーシュラムにたどり着きました。中に入り、水を持ってきてくれるように請いましたが、何の返事もありません。王は庭を歩き回り、むなしく呼び続けました。ついに、バニヤンの木の下に微動だにしない人影を見つけました。パリクシトゥ王が近寄って見ると、聖人シャミカが鹿革のマットの上で目を閉じて座り、瞑想に没頭していました。

パリクシトゥ王は聖人に近づき、敬意を込めてお辞儀をし、穏やかな声で自己紹介して水を請いました。シャミカはまったく動きません。王は少し大きな声で再び頼みましたが、聖人はじっとしたままでした。パリクシトゥ王は木の下に座り、聖人が瞑想から覚めるのを待ちました。

王は待って待って、喉は渇ききっていらいらしてきました。とうとう彼はそれ以上耐えられなくなりました。いら立ちに駆られ周りを見回すと、死んだ蛇がそばに横たわっているのを見つけました。怒りが渦巻いた心で、パリクシトゥは弓の先でその蛇を拾い上げ、聖人の首の周りに掛けました。それでも聖人が動かないと、王は激怒して出て行きました。

聖人シャミカには若い息子がいて、名をシュリンギといいました。厳しい苦行を通して、シュリンギはある程度、精神的な力を得ていましたが、いまだに短気でした。パリクシトゥ王がシャミカのアーシュラムを去ってほどなく、シュリンギが戻りました。彼が入口に近づくと、友人たちが走り寄ってきて、王が聖人シャミカにしたことを言って、彼をからかい始めました。

腹を立てたシュリンギは叫びました。「父を侮辱した無礼な男をこらしめてやる！　彼に天のたたりあれ。一週間以内にパリクシトゥ王は蛇の王タクシャカにかまれて死ぬだろう！」それからシュリンギは、いまだ静かに座って瞑想している父親の元に駆け寄りました。「父よ、父よ」若者は叫びました。「目を覚ましてください！」

聖人はゆっくり目を開けて言いました。「息子よ、何事か？」

「見てください！」シュリンギが蛇を指差しました。「死んだ蛇！　パリクシトゥ王があなたをひどく侮辱したのです！」

聖人は蛇をちらりと見下ろしました。彼は気にする風もなくそれを払い落としました。「こんなことは大したことではない」と、彼は息子に言いました。「こんなつまらないことを気に病んではいけない」

「もう遅いです」シュリンギは言いました「私は王に呪いをかけました。彼は 7 日以内に蛇にかまれて死ぬのです！」

聖人はぎょっとしました。「この愚か者！　おまえは狂ったのか？　喉の渇きといら立ちに駆られた気高いパリクシトゥの不用意な行動が、彼の命を奪い、人々からその良き王を奪う理由にもならない。パリクシトゥ王はダルマの擁護者だ。彼はカリ・ユガの危険からこの世界を守っている。おまえは怒りを制御することを学ばなければならない。アーシュラムを出て森へ行きなさい。そして自分を制御することを学び取るまで苦行を続けなさい」

シャミカは、息子の呪いが解けないことを分かっていました。いったんかけられた呪いは必ずその通りになるのです。しかし少なくとも、悲運を迎える準備をするようパリクシトゥ王に警告することはできました。そこでシャミカは伝言を届けるために弟子の一人、ガウラムクを送り出しました。パリクシトゥ王はハスティナープラにある彼の王宮に戻っていました。王は心が澄むにしたがって、聖人シャミカに対する無礼な態度を思い返し、心の底から後悔しました。自分が行った恥ずべき行動をどうやって償えばよいのか熟考していたとき、付き人がガウラムクの来訪を告げました。王は直ちにその使者を招き入れるように言いました。

「陛下！　陛下！」ガウラムクは言いました。「聖人シャミカから緊急の伝言を持ってまいりました」

震える声で、ガウラムクはパリクシトゥ王に、呪いについて話しました。王は目を大きく見開き、それでいながら冷静でした。王は深く息をついて、感謝を聖人に伝えるようガウラムクに頼みました。王は、聖人の息子に何の恨みも抱きませんでした。それどころか、彼は自分が死ぬ時を知って感謝したのです。今、彼は自らのすべての力を注いで神を見つけるつもりでした。

王はすぐに、息子に王位を譲りました。所有していた絹や宝石、武器や富は手放し、人々に別れを告げました。それらすべてが済むと、死ぬ前に自分を解放へと導いてくれる人物を探しに、神聖な川ガンガーの岸へと旅立ちました。

この神聖な巡礼の土地で、パリクシトゥ王は多くの高名な聖人に会いました。彼は一人一人に謙虚にお辞儀をし、尋ねました。「探究者が解放に到達するにはどうしたらよいのでしょう」。それぞれの聖人が自らたどってきた道を語りました。ある人は山の洞窟で何年も瞑想し、ある人は何カ月も難しいヨーガの姿勢を取り続け、ある人は厳しい苦行をし、何度もヤグナを行いました。しかし、パリクシトゥに残された時間がどんなに短いか説明すると、皆一様に首を振りました。

「私は悟りを得るまで何度も生まれ変わり、1000 年もかかったのだ」と、ある聖人は言いました。

「私は 100 年かかって 3 回生まれ変わったのだ」と、他の聖人は言いました。

あるとても高齢の聖者はパリクシトゥをつかむようにして、自分は 1 万年も修行している、とささやきました。

運の良いことに、もっとよく分かっている聖人がいました。彼はシュカデーヴといい、偉大な聖人ヴェーダ・ヴャーサの息子で、悟りを得ていました。

シュカデーヴがガンジスの岸を歩くと、巡礼者や聖人たちが皆彼に会いに駆け寄り、プラナームをささげました。彼は、英知の光で輝いていました。彼は何世紀も生きてきましたが、どう見ても 16 才以上には見えませんでした。多くの人が、彼の中に深遠な静寂を感じ取りました。

パリクシトゥは近くに来たシュカデーヴを見て、すぐに分かりました。彼はシュカデーヴの足元に深くお辞儀をし、聖人のために座る場所を整えました。そして目に涙をためてパリクシトゥは言いました。「おお、気高い人よ。あなたのダルシャンを得たことは言葉にならない幸運です。私が母のお腹にいるとき守ってくれた神は、あなたと共にいる祝福をくださいました。私は呪いをかけられ、間もなく死にます。私のただ一つの願いは、この地上を去る前に解放に到達することです。私を助けてくださいますか」

シュカデーヴは、ほほ笑みました。神を見つけるために世を捨てた素晴らしい王の顔に、燃えるような切望を見ました。「よろしい」と、彼は言いました。

パリクシトゥの心は喜びに踊りました。シュカデーヴのダルシャンに集まった他の聖人や巡礼者は近くに集まり、次の言葉を待ちわびました。

「解放はあなたの中にある」と、シュカデーヴは言いました。「すぐにでもそれを見つけることができる。あなたがすべきことは、神の名をチャンティングすることだけだ」

「神の名をチャンティングする？」パリクシトゥは言いました。「私は何百年もの年月と数えきれない苦行が必要だと思っていました」

「王よ」シュカデーヴは言いました。「私を信じなさい。この暗いカリ・ユガの時代において、善良さ、規律、そして道徳が危機にさらされるとき、神の名をチャンティングすることは神の加護である。愛を込めてチャンティングするとき、あなたは時と場所を超越する。カリ・

ユガの罠から自由になり、自分自身の至福に浸るのだ。大いなる名の愛に溶ける瞬間、あなたは解放を見つけるだろう」

そしてシュカデーヴは大いなる名のチャンティングを始め、パリクシトゥは聖人の響き渡る声に自身の声を重ねました。彼は心を込めてチャンティングし、彼の全存在を神にささげました。まもなく、大気は神の栄光を歌う無数の声で脈打ち出しました。パリクシトゥは完全にその大いなる名の音に、意味に、愛に没頭しました。7 日 7 晩、彼はチャンティングしました。何度も何度も、大いなる名は彼の息に乗り、彼の存在を浄化し、ついにパリクシトゥはその息が神であること、その音が神であること、その大いなる名が神であること、彼自身が神であることを悟りました。その瞬間、神の名のチャンティングを通して、この偉大な王パリクシトゥは解放に到達したのです。

そして、こうして、サプタという精神修行が生まれました。

© 2020 SYDA Foundation®. 著作権所有。